



第30号

(年2回発行)

発行所
喜多流大島能楽堂
 〒720-0814
 広島県福山市光南町2-2-2
 TEL 084-923-2633

- P2 「能」が舞台上で要求しているものは何か
高林白牛〇一
- P4 肚で打つ
谷口正壽
- P6 学芸員目指して修行中
篠田弥生
- P8 古典の授業は謡で
森和子

新たに百一年、百二年へ

喜多流職分 大島 政 允

昨年十二月、大島能舞台百周年記念能を催しましたところ、多くの皆様方にご高覧頂き、共にこの大きな節目を祝して頂き誠に有難うございました。百周年に合わせたように中国文化賞(中国新聞社)と催花賞(法政大学能楽研究所)も受賞致しました。誠に有難く長年ご支援下さいました皆様方に心より御礼を申し上げます。

この夏、福山市内の某語学学校に台湾の若者が日本語を学びに来日し、インターネットで私方の能楽堂の事を調べ、能を学びたいと訪れました。一週間に二回計四回、謡と舞を稽古、最終日に稽古舞台にて紋付袴姿で発表しました。短期間で不十分な稽古ではありましたが、彼は大層喜んでくれました。今後又、来日し再度稽古を続けてくれればと思っております。

ところで、福山市は大正六年に市制が施行されましたので、平成二十八年には市制百周年記念事業を盛大に計画されているようです。祖父の大島寿太郎が能楽「輛浦」を創作し初演したのも大正六年です。祖父は



舞囃子「融」大島政允 (2014.7.28)
 大鼓 亀井広忠 小鼓 横山幸彦

福山市制施行を祝して新作能を作ったのかもしれませんが。そこで、百年後に福山で能を継承する我々も市制百周年を祝して、記念事業にご協力できればと思っています。福山の歴史を織り込み、福山初代藩主の水野勝成公と幕末のペルー来航時に平和主義を貫いた老中首座の阿部正弘公が時空を超えて登場する新しい能楽を制作予定です。楽しみにしててください。

「能」が舞台上で要求しているものは何か

高林 白牛口二

「能」とは一般的に云つて何でしょうか。それは観阿弥・世阿弥父子がその頃の要人の娯楽のために、世上に流布していた芸能を集大成させて作り上げた、仮面を使用する歌劇の一種と既定されています。しかし、それだけでは解決の出来ない様々な疑問が生じます。第一に如何なる時も摺り足なのは何故でしょうか。第二に無表情の代名詞とされている能面を使うのは何故でしょうか。この二つの疑問を解き明かして「能」の特異性と原点を究める必要があります。

まず、芸能の原点とは何から起こっているのでしょうか。現世には科学では説くことの出来ない、宇宙森羅万象を司る絶対者の存在があります。これは仏教でも基督教でも神道でも同じですが、それらを全て含めて人間の知識を超越した絶対者の存在があります。これを仮に「信の神(マコトノカミ)」と名付けます。人類は発生の時よりこの「信の神」の存在を信じてきました。与えられた恩恵に対して報恩の気持ち表現することから生じたものが、芸能の始まりです。悦びの心の発露として、歌を歌い舞を

舞つて「信の神」に感謝の念を伝えることが、芸能の起源です。「能」も芸能の一つです。但し大切な事は「能」の起源は「翁」にあると云うことです。一般に「翁は能にして能にあらず」とよく言われますが、これは何を意味しているのでしょうか。本来は「翁」が「能」の眼目な

のです。そして「高砂」以下の曲は「後宴の能」と云い、儀式の余分なのです。「翁」は原始宗教の儀式なのです。演ずると云う気持ちは一切不要であり不可なのです。その「翁」から派生した芸能ですから摺り足なのです。人類が敬虔な気持ちになると、必然的に摺り足になるのです。「能」の型には凡そ表情・演技に無関係な型が、基本的に随所に使われています。それらの型は全て「翁」の根本にある所作すなわち礼拝(ライハイ)から始まっているからです。例えば「シカケ・ヒラキ」は達拝を基としていますし、「左右・シトメ」は両袖の露を払つて礼拝をする型が基となっています。何れも「翁」の基本の型です。では一曲の中核をなしている「舞」と云われる、序之舞や神舞

舞つて「信の神」に感謝の念を伝えることが、芸能の起源です。「能」も芸能の一つです。但し大切な事は「能」の起源は「翁」にあると云うことです。一般に「翁は能にして能にあらず」とよく言われますが、これは何を意味しているのでしょうか。本来は「翁」が「能」の眼目な



たかばやし こうじ
高林 白牛口二氏

昭和10年11月8日生まれ
国重要無形文化財総合指定
父 故高林吟二に師事
昭和16年「隅田川」子方にて初舞台
昭和57年4月より京都にて「喜多流涌泉能」を主催
平成10年7月「卒都婆小町」
平成21年6月「鸚鵡小町」
平成24年6月「伯母捨」
高吟会代表
京都府在住

等は、何を意味しているのでしょうか。これらは全て、「翁」の舞の理念から出来ています。特に喜多流では、重要な教えの中で、「舞」においては一切の感情や作為を、禁じています。これは非常に重大な教えです。根源に「翁」の舞がある事を教えているのです。今の能の世界では、このことが忘れられています。特に現在、世阿弥による能楽論を論じる場合、世の中に出口回っている世阿弥の文献には、世阿弥が「翁」について論じているものがないため、「翁」が「能」の原点であることに、一切触れられていないと云えます。

「能」は「翁」を原点としているため、娯楽本位では成り立ちません。型の一つ一つを取り上げてみても、演技や所作としての意味のない型が大半を占めています。と云う事は演技や所作を工夫しても「能」は成り立たないと云う事になります。例えば「泣く」という所作を考えてみましょう。指を伸ばして掌を顔に近付けるだけで泣くことになるのです。一般的に考えて、どうしてこれが泣くと云う表現になるのでしょうか。所作以上に役者の内面的充実さが求められているからです。その内面の充実こそが、能面使用の目的と云えるのです。能面を使用することによって、役者自身の動物的肉体的感情や作為の全てが否定されます。その上で、役者自身の精神の昇華を表現することが「能」の本質と考えられます。最初に述べた「信の神」に対しての信仰心が、根底にあつて初めて「能」の

舞台上に上る事が出来るのです。ここに舞うということの原点があります。舞う心は、始動点の体内の中枢から涌き上がってくるものです。手にしても顔にしても、身体の中枢から動き始め、それが先端に向かって伝播して行って表面に現れるのです。全身を緩からず固からず中庸に保つて、精神を安静の状態に置くことを一曲終始一貫して努めなければなりません。歯を食い縛つたり顔の筋肉を硬直させたりしては、以ての外です。呼吸も自然に穏やかになります。その時の精神状態は、丁度禅僧が座禅をしている時と同じ次元なのです。このような状態になれば、発声も異なつてきます。咽喉・舌・唇等に力が入つてはいけません。息も短くなり声も通らなくなり、謡うと云う心になりません。精神の安泰を会得して、漸く神前の奉納が可能となります。観客は「信の神」の代理者です。見せてやるなんて心は毛頭必要です。究極の「能」は自分との戦いです。この戦いは胴着を着る時から始まり装束を脱ぐまで一貫しての精神力の充実が勝利となります。

私も能の家に生まれ来て、間もなく八十年になろうとしています。この年月の間に会得したものを次世代の者達に間違いなく伝えて行くことも、この「能」の世界に生きてきた者の務めと感じて、この一文の筆を執りました。最後に一言「能」は絶えることはありません。しかし関わる者全員が、真剣に無限の努力をする必要があります。

高吟会 涌泉能の沿革

京都における喜多流の歴史は、流祖の時代より始まり、現在まで延々四百年近い歴史を持っています。その京都の喜多流を、最初から支えてきた家は、堀池家でした。その堀池家の芸事の後継者として、堀池延叟に囑望され、由緒ある京都の喜多流を託されたのが、私の父、高林吟二です。京都在住の喜多流者としての責任を感じ、それを護持し伝えてきました。堀池の家が断絶したわけではありませんので家名は継がず、藝系を伝える証として家紋と伝書を引き継ぎました。高林の家は、代々京都禁中の能奉行などを勤めた家柄です。高林吟二の実父宗三郎は、喜多流としては極めて初期に、謡教授に任ぜられています。

私は、昭和10年に生まれ、父のみの薫陶を幼少の頃より受け、京都の喜多流の伝承を守って今日に至っています。昭和46年に、喜多実十五世宗家により、喜多流の職分の一員に加えられましたが、その年に父は、脳溢血で倒れました。一年後になくなりましたとき、私は36歳でした。

その後、息子の呻二が高等学校を卒業するのを待って、昭和57年4月に、この「涌泉能(正式名称は喜多流涌泉能です)」を始めました。それより毎年春秋二回、能を二番ずつ、休まずに続けてきています。平成13年からは、孫の昌司が加わり、能が三番になることもあります。

高吟会という名は、創始者高林吟二が、自分の名前から取りました。謡を高らかに吟ずるという意味です。

肚で打っ

石井流 大鼓方

谷口 正 壽

たに ぐち まさ とし
谷口正壽氏

能楽石井流大鼓方

国総合認定重要無形文化財

本名成田有辞 (なりたゆうじ)

昭和43年生

小鼓を愛好していた祖母の影響を受け幼少の頃より能に親しむ。

昭和54年(10歳)に石井流大鼓方宗家代理の谷口正喜に入門。

昭和55年(11歳)に「百萬」で初舞台。以後「石橋」「猩々乱」「道成寺」等の大曲を抜く。

平成6年に修行時代の仲間らと心味の会を結成。

平成9年に谷口正喜の芸養子となり谷口有辞と名乗る。

平成19年に長唄、地歌などと能楽をコラボレートする京都創生座プロジェクトチームに参加。

以後、中核メンバーとして平成20年「俱利伽羅忠度」平成21年「四神記」平成22年「舞扇要結縁」に出演すると共に脚本の一部を手がけるなど能楽の新たな可能性を探る。

平成23年に谷口正壽に改名。



私は、谷口正壽と申します。石井流の大鼓方です。ちなみに、私の本名は成田有辞と言い、幸流小鼓方の成田達志は実兄です。成田家と福山の縁は、以前に兄が書いていましたので、谷口家や私が教わったことを書きたいと思います。

谷口の家は、元をたどれば備前高松で刀鍛冶を営んでおりました。有名な秀吉の水攻めの後、伏見に移住し、太平の世になつてからは、のこぎり鍛冶をしておりました。江戸期には、良品として名をなし、かなり大きな店となつたようで、谷清ののこぎりを持たない大工は、もぐりだと言われたそうです。今でも旧家には「谷口清三郎」の銘が入つたのこぎりが残っていると聞きます。皆様のお宅にもあるかも知れません。

明治期に分家した谷口喜三郎が、石井一斎の門人となり、大鼓の家としての谷口を起こしました。その後、幸治郎・喜代三・勝三の三兄弟。喜代三の長男正喜らが、大鼓方として京都を中心に活躍しました。正喜には子がなかつたため、私が跡を継ぎ、現在に至っております。

その谷口の教えは「肚で打て」です。私が、師匠から教わつたのも「下肚に力を入れてピヤツと打て。」この一言に尽きます。

この「肚で打つ」とは、肚に重心を置くことで、上半身をリラックサさせて腕の力を抜いて打ち、肚から声を出し、間を取り、ノリを作る。そして何よりも、心を肚に置き、ゆったりとしながら、気をつめて構えることと、解しております。

元来日本人の心は、肚にあります。「肚を決める」「胆力」「腹が立つ」「腹を割って話す」「腹の据わつた人物」そして、「腹心の友」など、心と肚をつなげた言葉がいくつもあつたことから、そのことがわかります。

ところが、現代の日本人に「あなたの心は体のどの部分にありますか？」と尋ねると、ほとんどの人は胸か頭を指します。椅子に座る西洋式の生活、街にあふれる欧米文化などの影響でしょうか。胸や頭に心があると、窮屈な構えになってしまうですが、意識を下腹部に持っていくと、不思議と気持ちが落ち着き良い意味での緊張に心を持つていきます。

普段は、京都の舞台に出ている私としましては、喜多流とお相手させて頂くのは、貴重な機会です。しかしながら喜多流は、観世流や金剛流と、大きく変わることはないのですが、細かいところが、ちよちよこと違うのです。しかも、たいてい申し合わせ無しの一発勝負です。これは恐怖でもあります。こういう恐れる心には、肚で打つことが大切になります。

肚で打つことの中で、特に大切なのは、肚で間を取ることだと思います。

大鼓は打楽器ですので、リズムを作る役割なのですが、単にリズムを作るだけではありません。能の場面場面に沿ったドラマを、間で表さなければいけません。このドラマを作る上で、タイミングを合わせただけの間と、肚で取った間では、充実度が全く違います。時には浮き立つように、時にはしつとりと、時にはどっしりと肚で間を取ることとで、大鼓は能のドラマの一部となれるのです。

はらはらはららと、肚のことを申し述べてきましたが、これらを実践することは、大変難しいことです。まだまだ未熟ではありますが、これからも師匠から受け継いだ「肚で打つ」を心がけ、肚で間を取り、「腹鼓」ではなく「肚鼓」を打ちたいと思います。



能「邯鄲」 シテ 大島輝久 (2013.6.16) 大島能楽堂 池上嘉治撮影
太鼓 前川光範 大鼓 谷口正壽

学芸員目指して修行中

ネルソン・アトキンス美術館

篠田 弥生

今年六月、京都と福山を教室に、シアター能楽主催の『Japanese Textile and the Art of Sculpting Kimono : A Noh Costume Workshop』と題した、能装束に焦点を当てたワークショップが開催されました。ワークショップの参加者はアメリカから三名、フランスから一名、日本から二名と、中々国際色豊かで、様々な視点から能と装束について考える、格好の機会となりました。私は東京出身ですが、現在アメリカ・ミズーリ州のカンザスシティ市に住んでおります。六年前に留学生としてカンザスシティに来て、その後ネルソン・アトキンス美術館に職員として採用されました。現在は東洋美術部のアシスタントとして、学芸員を目指して、日々勉強、修行中です。

ネルソン・アトキンス美術館はアメリカ、ミズーリ州のカンザスシティ市に一九三三年に設立されました。アジアをはじめとして、アメリカ、アフリカ、オセアニア、ヨーロッパ、と世界中から集められた美術品が館内を通して展示されています。コレクションの中には、二〇〇〇点ほどの日本美術品も含まれ、絵画、工芸、仏教、古典芸能等、多様なジャンルの中から選ばれた美術品が、日本ギャラリーにて常設展示されています。コレクションには、能装束は二五点、能及び狂言の面は一八点含まれており、その中から毎回数点が展示されています。現在展示中の狩衣は江戸後期のものといわれています。実は今年の初めに染織品のコレクション調査を行い、今まで展示されなかった能装束が何点かあることがわかりました。未公開の装束の中



ネルソン・アトキンス美術館ホームページ：<http://www.nelson-atkins.org/>

日本美術品コレクション紹介ページ：<http://www.nelson-atkins.org/collections/collection-history-japanese.cfm>

には、江戸期のものを中心に、時代を経てアメリカまで渡ってきた作品が何点も残されています。多少の修復作業を要するものがほとんどですが、長期計画の一環として、未公開の装束を展示しようと企画中です。現在は装束について詳しい職員がいいため、期日未定の計画となっておりですが、近い将来小規模でも特別展示を行いたいと考えています。調査の期間中は、私も装束については基礎の知識があるのみで、それぞれがどのような身につけられているのか、ほとんど知りませんでした。ちょうど同時期に同僚の中国美術の専門家が、シアター能楽主催のワークショップの広告を見て、私が参加することを勧められました。調査の直後という、とても良いタイミングで参加できたことは、非常に幸運だったと思います。

ワークショップの前半は京都でモニカ・ペーテ先生について、装束に使われている織物がどのような素材、工程を経て作られているのかを学び、装束や唐織の織元、金糸銀糸専門の工房、篠山市の能楽資料館、春日神社の能楽堂などを訪れました。日ごろいろいろな織物を目にしますが、実際にどのように織られているのかを見学するのは初めてでしたので、驚嘆の毎日でした。職人さんたちの洗練された技を間近で拝見し、一枚一枚の織物が、時間と気力をかけて作り上げられた芸術作品なのだ、ということを知りながらあらためて実感しました。

そしてワークショップの後半では、教室を福山市の大島能楽堂に移動し、今まで目にするだけだった装束に、袖を通す機会を得られました。

着付け方を体験する前に、大島能楽堂の定期公演の舞台裏で、実際に能楽師の方々がどのように装束を着けられるのかを見学させていただきました。初めての舞台裏の緊張感に圧倒し、着付けの手早さに見入りました。その翌日、稽古場にて大島政允先生、輝久先生、衣恵先生のご指導のもと、装束を着ける練習が始まりました。私個人の最初の発見は、和服を着る時と装束をつける時の相違でした。和服よりもたつぷりとしたように感じられる身頃、紐を使いながら着せ付けていく行程、帯を使わず紐で腰周りを締める、といった、舞台や写真からははつきりとわからなかった細かな違いを体験できて、とても良い勉強になりました。また装束を身に着けてその軽さに驚き、同時にその暑いことにも驚きました。さらに面をつけてみて、いかに視

界が限られているかを知り、外観からは想像できない世界があることを知りました。以前に聞いた話や読んで学んだことが、どのように身につけられているのかがやっとわかりました。まさに「百聞は一見に如かず」ですね。このような体験ができたことは、今後の美術館での仕事に大いに役立つことと思いますし、また一個人として、日本の誇れる文化である能の舞台裏に触れたことを大変嬉しく思っています。海外からの参加者の方はより一層新鮮な印象を持たれたようです。最後になりましたが、ワークショップ中私たちを歓迎し、手取り足取り辛抱強くご指導くださった先生方、また快くお世話してくださった能楽堂の皆様にご挨拶を述べさせていただきますと思います。どうもありがとうございました。



古典の授業は謡で

森
和子

私が能を始めたきっかけは、十年程前、当時携わっていた高校演劇の指導に役立つと思ったからだ。立ち方、歩き方、声の出し方など、

すべてが能の中にあることに驚いた。職場が変わって、演劇の指導をすることがなくなっても、汲めどもつきない能の魅力に取り付かれて稽古を続けた。

能には生きる知恵が盛り込まれている、そう思った。

能を現代の生活の中に生かせないか――。

次に考えたことは、古典の授業で能ができた

いか、ということだった。古典の授業を文学的に楽しむ授業にするにはどうすればよいか――

国語の教師をしたことのある人なら、その苦労がわかるであろう。現代語とかけはなれた文章を理解するためには、文法は欠かせない。が、文法の話を始めると、途端に生徒はやる気を失う。そうかと言って、大学受験のためには、文

法は不可欠だ。ジレンマに陥る国語の先生は多いことだろう。伝統の言語文化に触れつつ、美しい日本語を感じる古典の授業にならないか。

知識としての古典でなく、体験する古典――謡

をやらう！そう考えて、選択の古典の授業で、謡と仕舞に取り組むことにした。六年前のことだった。以来毎年の取り組みにしている。

幸いにも忠海高校は一学年が二クラスの小規模の学校で、少人数の選択授業が行われている。「古典基礎」の授業は、今年度二十二名の希望者があった。畳の部屋で、まず正座をしてもらった。中には足首の筋が堅くて、正座ができない生徒もいた。日常の生活では、正座をすることはほとんどない。なんとか正座ができて、五分ともたない。週二回の授業で少しずつ

慣れてもらった。次に、膝を立て、まっすぐ立ち上がる練習をした。ふらつかずに立ち上がるのは至難の技だ。畳の上をすり足で歩く体験もした。

六月の文化祭で、「高砂」の謡と仕舞「湯谷」を発表しよう、と言うと、「いいよ」と生徒たちは言ってくれる。「着物はどうする?」と聞くと「着たい」という。目標を立てると、生徒は真剣にやってくれる。「高砂」は結婚式には必ず謡われていたことや、「湯谷」は『平家物語』に題材を採っていることなどを話す。最初に私が謡って、一句ずつ謡ってもらった。生徒たちは素直で、実にいい声で謡ってくれる。生徒たちの声を聞くだけで、幸せな気持ちになる。発表一週間前に衣恵師に来てもらって、全体の流れを見ていただく。扇・袴・帯・足袋に至るまで大島能楽堂でお借りして、当日着付けに大島泰子氏にご足願った。四月から稽古を始めたばかりで、拙い発表だったが、生徒たちは一生懸命だった。十一月には研修旅行でシンガポールに行く。現地の学校との交流会で披露することになっている。秋に向けて、二学期からまた稽古しようね、と言って夏休みに入った。



もり かず こ
森 和子氏

脚本家。
神戸女子大学文学部国文科卒。
広島県立忠海高等学校非常勤講師。
喜多流シテ方大島衣恵師・大倉流小鼓方久田舜一郎師・
高橋奈王子師に師事。
福山喜多会会員。
福山市在住。





能「田村」シテ 大島政允 (2014.4.20) 大島能楽堂 池上嘉治撮影



燦の会 能「自然居士」シテ 大島輝久 子方 大島伊織
(2014.5.31) 東京喜多能楽堂 池上嘉治撮影



能「大会」シテ 大島輝久 (2014.7.28) 福山八幡宮



能「杜若」シテ 大島衣恵 (2014.6.15) 大島能楽堂
Phot by David Surtasky



能「葵上」シテ 大島衣恵
(2014.8.18) 岡山後楽園能舞台



能「船弁慶」シテ 大島輝久 子方 大島伊織 (2014.8.10) 三和の森光信寺

演能ご案内

2014年

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
9月21日(日)	第239回 大島能楽堂定期公演	12:30	大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「清経」 大島輝久 狂言「口真似」 茂山千五郎 能「殺生石」 大島衣恵
10月19日(日)	福山総合文化祭秋の会	11:00	大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
11月3日(祝)	後楽能	12:00	岡山後楽園能舞台	3,000円	社中発表会 能「海人」 大島衣恵
11月7日(金)	はじめての能楽大会	13:00	岡山後楽園能舞台	無料	能学習発表・鑑賞
11月16日(日)	第240回 大島能楽堂定期公演	12:30	大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	お話 金子直樹 狂言「太刀奪」 茂山正邦 能「三井寺」 大島政允
11月23日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能「黒塚」 大島輝久 (政允代役)
11月30日(日)	広島大島会秋の会	10:00	アステールプラザ能舞台	無料	能「俊成忠度」「羽衣」 「鞍馬天狗」他
12月2日(火)	第8回 広忠の会	17:00	鏡仙会能楽研修所	自由席 8,000円	能「山姥」 大島輝久
12月6日(土)	報美社15周年特別記念能	15:00	アートコンプレックスセンター	事前登録制	能舞「狸々」 大島衣恵

2015年

1月3日(土)	新春能楽祭	12:00	沼名前神社	無料	翁奉納
1月17日(土)	瀬戸内文化のにぎわい	13:30	アステールプラザ能舞台	700円	
1月18日(日)	喜多流新年初謡会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
3月29日(日)	宗吉史跡まつり	15:30	三豊市宗吉瓦窯跡	無料	能舞
4月19日(日)	第241回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「湯谷」 大島衣恵 能「阿漕」 大島政允
5月17日(日)	社中追善喜多流春の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	
6月21日(日)	第242回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「富士太鼓」 大島衣恵 能「舍利」 松井彬
9月20日(日)	第243回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「東岸居士」 金子匡一 能「紅葉狩」 大島輝久
10月18日(日)	福山総合文化祭秋の会		喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
11月15日(日)	第244回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「江口」 大島政允
12月20日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能「橋弁慶」 大島輝久

編集デスクより

・“能舞台でばら祭”に集まった小さい子たち。小謡「輛のむろの木」はちょっと難しかったかな？

・能楽関係の書籍等をご寄贈下さいました亀川幸郎氏が8月13日にお亡くなりになりました。「ひろしま見所の会」を立ち上げられ、能楽の普及に長年ご尽力くださいました。大島能楽堂定期公演後の懇親会は亀川氏の能鑑賞談義をしたいとお申し出で10年程前から始まり、毎回楽しく有

意義な集いになっています。英語能「PAGODA」もここから生まれたと言えます。長い間のご後援に感謝の気持ちでいっぱいです。ご冥福をお祈り申し上げます。

・今号へご寄稿頂いた高林師の言葉『能は絶えることはありません。しかし関わる者全員が、真剣に無限の努力をする必要があります』私も日々、努力していきたいと思えます。大島泰子

喜多流大島能楽堂

〒720-0814

広島県福山市光南町2-2-2

TEL 084-923-2633

FAX 084-923-8730

<http://www.noh-oshima.com>

